

## 耕作放棄地の再生と農業経営を通じた6次産業化 ～「満天きらり」が地域の未来をともし～

農業生産法人 株式会社 神門  
○石井 啓介  
住吉 伸明

### 1. 雄武町の概要

雄武町は北海道のオホーツク総合振興局最北に位置し、漁業と農業が基幹産業の町です。雄武町の農業は、夏季はオホーツク海高気圧の影響を受け、冷害が多いという厳しい気象条件であり、加えて土壌のほとんどが低位生産性の重粘土となっている。そのため酪農に特化し、現在では乳用牛と肉用牛あわせて約一万頭（町人口の倍以上）であり、搾乳ロボットや雌雄判別などの先進技術の導入も進んでいる。

しかし、近年では農家数の急激な減少や高齢化等により、遊休農地等が増加し、平成 23 年度には約 320 h a の農地が耕作放棄地となった。



写真1 雄武町の風景(乾燥貯蔵施設の上空から UAV で撮影)

こうした農地を「再生」し、「新たな作物を導入」し、町の「新たな特産品化」に向けた活動を紹介します。

### 2. 活動の経緯

町の西部に位置する上幌内集落は、林業・酪農などで栄えたが、平成 8 年頃には消滅集落になった。農地に関しては 20 年ほど前から耕作されていない土地が増え、この集落だけで約 180 h a の農地が耕作放棄地（平成 20 年時点）となった。

先人が苦勞して切り開いた農地を何とか後世に残したいと考えた田原賢一氏（故人、本法人の設立者）は、町長時代より耕作放棄地の活用を検討した。雄武町で生産可能な作物を北海道農業研究センターと連携して模索した結果、「韃靼（だつたん）そば」の生産に着目した。

「韃靼」とは山岳地帯である中国雲南省の西北部付近を示す。少数民族が多いこの地域では、高血圧や糖尿病などの発症が極めて少ないという特徴があり、その要因は、この地域の住民が食する「韃靼そば」であると言われている。雄武町の厳しい気象条件や土壌条件の環境でも安定した生産が見込める作物として導入を推進した。

平成18年から6年間の試験栽培を重ねて誕生したのが「満天きらり」。この品種は、従来の品種に比べて苦みがかなり弱く、ポリフェノール的一种であるルチン含量が多く、抗酸化作用を持ち、高血圧症や動脈硬化など生活習慣病予防などに効果があると言われている。

その新品种「満天きらり」を、再生した耕作放棄地で栽培し、農地のあるべき姿に戻しつつ、これを活用した新たな特産品化を目指した。



写真2 雄武町上幌内地域の耕作放棄地(H25)



図1 満天きらりのチラン(農研機構ホームページより)

### 3. 活動の成果

#### 1) 農用地の再生

平成24年より雄武地域の遊休農地等を再生して、約14haの韃靼そばを栽培した。強粘性という土壌条件の中、反当り約90kgの収量を記録し、今後の展開に自信を深めた。

その翌年(H25)には、雄武町耕作放棄地対策協議会が主体となり、耕作放棄地再生利用緊急対策交付金(以下「交付金」)を活用し、上幌内地域を中心に耕作放棄地の再生に着手した。

土のシバれ（凍結）がなくなる 5 月 GW 頃から作業が開始され、写真に示す流れで抜根・排根作業に着手、耕起作業、砕土作業を短時間のうちに終了させる。生い茂る樹木は高さ 10m 以上にもなることもあり、こうした圃場では伐採作業を先行して実施する。

また多くの農地で石礫が散在し、伐採や除去に多くの時間を費やす圃場も存在した。それでも初年度目の再生作業は 7 月上旬に播種を終わらせることができた。

再生作業後に収穫した翌年には、同交付金のメニューである「土壌改良」（肥料等の散布）を行い、農地の機能の回復を図った。



写真3 工事着手前



写真4 伐木作業



写真5 耕起作業



写真6 整地作業

こうした苦労を重ねながら、交付金を活用した農地再生は平成 28 年度までに 176ha を数え、この年、第 8 回「耕作放棄地発生防止・解消活動表彰事業」にて農林水産大臣賞の受賞を迎えることができた。これもひとえに関係機関による支援の賜物と存じています。

また平成 27 年度には、同交付金を活用して韃靼そばの貯蔵製粉施設を建設した。これを榊神門が使用することで、韃靼そば粉を活用した商品開発、販売展開への道が開かれた。

## 2) 農業生産

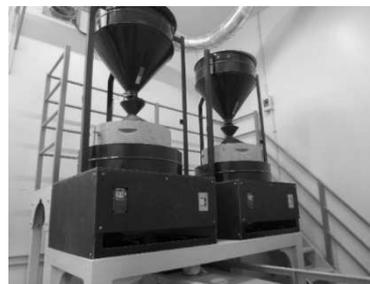


写真7(上) 石臼挽き設備 写真8(下) 貯蔵

平成29年度には韃靼そばの作付面積は211haを数え、市町村別では日本一の作付面積と生産量になった。しかし、単収は気候の変動を受けやすく、図2のとおり生産は不安定となっている。

平成26年は目標を上回る収量を記録したが、平成27年は6月生育初期の長雨、9月の低気圧による風害（倒伏）、平成28年は8月に度々上陸した台風による倒伏が要因として考えられる。

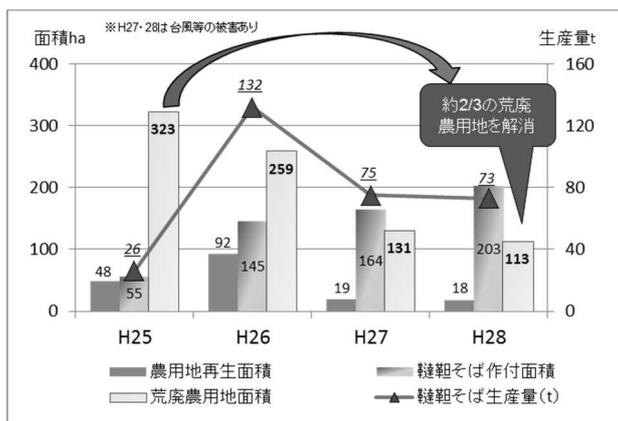


図2 農用地再生面積と生産量

石礫の多いところでも生育するが、耕起といった機械作業には支障となる。さらには湿気の多い場所では育ちが悪いという課題がある。こうした点を改善するため、国営緊急農地再編事業で圃場条件を改善中です。

上幌内地域では幌内川がオホーツク海にそそぐ。海ではホタテや鮭、流氷明けの毛ガニといった雄武前浜の豊かな海産資源の保全が課題であり、化学肥料の使用を控えた農業の展開が求められている。そこで上幌内の



写真9 赤クローバー

全域において韃靼そばの種子に赤クローバーを混ぜて播種。表面を這う赤クローバーにより雑草の混入を防止するだけでなく、鋤き込んだ際には肥料となる。本年度、「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」に基づく知事認定を受け、環境保全型農業直接支払いの交付を受けることとなった。

### 3) 6次産業化

#### ● オリジナルの商品

韃靼そばを活用した商品はこれまでに「焼酎」(H25)、「乾麺」(H28)、「韃靼そば茶」(H29)である。

焼酎はニセコ町の二世古酒造に製造を委託し、アルコール度数は25度、韃靼そばの含有は30%ながらもそばの香りが高く、すっきりした味を楽しめるのが特徴。韃靼そばを茹でた蕎麦湯で割るのが最もおいしく飲める。



写真10 韃靼そば焼酎「神門のしずく」

乾麺は清水町の田村製麺に製造を委託し、韃靼そば粉の含有30%と50%の2種類を用意。30%でも韃靼そばの芳醇な香りを楽しめる。50%の麺はさらに強い味わいとなっている。いずれもこれまでの韃靼そばの特徴である「苦味」はない。ただし茹でた後に放置した場合、苦味が出ることがある。またゆで汁は日本茶のような鮮やかな黄色となり、そのまま飲んでも、麺つゆや焼酎で割っても香りを楽しめる。札幌駅のどさんこプラザなどで購入することができる。

韃靼そば茶は、韃靼そばの固い実をくり抜く技術を持っている本州の日穀製粉に委託して製造。そのまま食することもできるので、サラダなどのトッピングや、または白米と一緒に炊き上げるなど、幅広く活用できる商品である。

さらに、韃靼そばに合うタレを開発。雄武町産の鮭節と利尻昆布を使用した「神門のつゆ」を、網走市の倉繁醸造に製造を委託。このタレで韃靼そばを食することで、海の幸と山の幸のコラボレーションが可能となる。

### ● そば粉の活用

製粉貯蔵を自社で行えるという強みを活かして、そば粉の販売を行っている。購入する業者の活用は様々となっている。

□サガミフード（愛知県等）：麺類を主力とする大手外食チェーン。定番メニュー化された。圃場の一つで契約栽培を行っている。

□小林食品（興部町）：雄武町の隣町に所在し、自社で乾麺と半生麺を製造・販売を行っている。ヘルシーDOの認証は小林食品を中心に農研機構や大学と連携し、本年度取得した。

□長命庵（札幌市）：西28丁目の地下鉄駅近くで韃靼そば専門店を経営。自身も郊外に韃靼そばを栽培。店長は北海道における韃靼そば生産者協議会の会長を務め、「ガレ



写真10 乾麺



写真11 韃靼そば茶

写真12 神門のつゆ



写真13 サガミチェーンの契約農場



写真14 サガミチェーンのメニュー

ソバ」をテーマにしたメニューを展開している。

ット祭り」(ガレットの粉は韃靼そば)などのイベントも手掛けている。

そのほか、パンやお菓子の製造業者などからの注文がある。契約には至っていないものの、機能性を求めて製菓関係業者からの問い合わせもある。

#### ● 地域内での取組

地域内で韃靼そばの認知度を高めようと、地元の方を対象に親子そば打ち体験会を開催している。この企画には町の「おうむ手打ちそばの会」に協力していただいている。また本年度は10月15日に「第1回韃靼そば祭り」を雄武町内で開催したところである。また、オリジナル商品については雄武町内限定の価格を設定している。



写真15 親子そば打ち体験会

#### 4. 未来に向けて

営農に関しては、本年度オホーツク総合振興局整備課のご指導のもと、UAV(ドローン)を購入した。生育の管理だけでなく、電牧柵のチェックなど幅広く活用している。

将来的には、少ない従業員で営農が展開できるように、農業機械の自動運転技術の導入を進めたいと考えている。再編事業による圃場条件の均一化がその前提となる。

また6次産業化については、更なる「機能性」を追求している。具体的には「グルテンフリー」の食材としての利活用に関する調査研究を、食品加工技術研究センターなどと共同で行っている。加えて有機認証やグローバルGAPの取得などにより、更なる付加価値向上をめざしている。

酪農専業地域における新たな営農展開であると自負している。活動を通じて魅力ある農業経営を実現し、未来を担う地域の子供たちに対して夢を与えられるよう、今後も努力していきたいと考えます。



写真16 雄武町上幌内地域の再生農地(H27撮影)